

共同利用・共同研究課題「近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照」

2019年度第2回研究会

日時：2019年7月27日（土曜日）14時から18時

場所：マルチメディア会議室(304)

当日のプログラム

1. David Brophy (AA研共同研究員, シドニー大学)

“Between Hagiography and Universal History: Muhammad Sadr Kashghari's *Asar al-Futuh*”

2. 木村暁 (AA研共同研究員, 東京外国語大学)

「ムッラー・アーリムの歴史叙述におけるトルキスタン」

3. 総合討論

参加人数：10名

報告

## “Between Hagiography and World History: Muhammad Amin Kashghari's *Aṣar al-Futuh*”

David Brophy (AA研共同研究員, シドニー大学・上級講師)

This presentation examined two Persian-language works by Muhammad Amin Kashghari, the *Durar al-Akhbar* and the *Aṣar al-Futuh*. Written in the last decade of the eighteenth century and now preserved in the Al-Beruni collection in Tashkent, these represent two drafts of an incomplete world history. Originally the author intended for his work to comprise two halves, the first from God's creation of the world down to contemporary Islamic dynasties, and the second on the history of “Uyghuristan”, (i.e. Moghulistan or Eastern Turkistan). Of the sections that were actually written, the author's narrative on Uyghuristan holds particular interest, representing the viewpoint of a member of the community surrounding the White Mountain Naqshbandi Khoja Sarimsaq. The presentation discussed the author's background as part of this exile community of Kashgharis in Transoxiana, and what the *Aṣar al-Futuh* can add to our knowledge of this community's history. The focus of textual analysis was on the author's efforts to blend his hagiographical narrative surrounding the White Mountain branch of the Xinjiang Naqshbandiyya with classical genre of Islamic world history. In the discussion, questions were raised as to the author's choices in defining the geographic scope of his world history. Kashghari's attitude towards

the Junghar Mongols and the Chinggisid principle of legitimacy also became topics of discussion.

## 「ムッラー・アーリムの歴史叙述における トルキスタン」

木村暁（AA研共同研究員、東京外国語大学・特任講師）

ムッラー・アーリム著『トルキスタン史』（1915年刊）は文字通りトルキスタンの歴史であるが、同書がいかなる空間的領域を扱い、それがいかなる理由によるのかは検討を要する。

ロシア帝国は19世紀半ばに中央アジア南部に侵攻し、1867年タシュケントにトルキスタン総督府を創設した。このトルキスタンの呼称は、現カザフスタンのトルキスタン市を中心とする地方名をロシア人がカザフ人の用法にならって新征服地に適用したものと考えられる。明確な行政区画として以後拡大するトルキスタンは結果的に、イランのペルシア語における用法とかなり重なる領域を指すようになった。

ロシア統治最初期から仕官したムッラー・アーリムは、1870年創刊のサルト語（ウズベク語に相当）新聞、『トルキスタン地方新聞』の記者となり、ロシア統治を称揚する立場から多数の記事を書いた。彼は1908～15年にコーカンド・ハン国の歴史を同紙上に連載し、ブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国の歴史およびロシア統治期の政治・社会状況を書き加えたうえでタシュケント占領50周年にあわせて『トルキスタン史』を公刊した。

彼は、みずから身をおくトルキスタン総督府直轄領を核としつつこれにブハラ、ヒヴァ領を加えた領域をトルキスタンとほぼとらえていた。この認識はロシア統治の既成事実強く規定されていたといえる。彼はトルキスタンの人々がロシア統治のもたらした発展を歴史という学問を通じて理解すべく『トルキスタン史』を執筆した。同書は独立後のウズベキスタンにおいていわば再発見され、それなりの注目を集めている。この歴史書への評価のあり方は、現代の政治状況を映し出してもいる。

以上の2本の報告はともに、ウイグルistan（新疆／東トルキスタン）、トルキスタンという地域・空間認識を検討するもので、総合討論でもその点を中心に議論が行われた。地域名称と帝国による統治・植民地支配の関係も今後の重要なトピックになりうると考えられる。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.